

礫川※ [#「イ+湫のつくり」、第3水準1-84-33] ※ [#「イ+羊」、第3水準1-84-32] 記

永井荷風

青空文庫

何事にも倦果あきはてたりしわが身の、なほ折節にいささかの興を催すことあるは、町中の寺を過る折からふと思出でて、その庭に入り、古墳の苔を掃はらつて、見ざりし世の人を憶おもふ時なり。

見ざりし世の人をその墳墓のぶに訪とふは、生ける人をその家に訪ふとは異りて、寒暄かんけんの辞を陳のぶるにも及ばず、手土産たづさへ行くわづらひもなし。此方こなたより訪はまく思立つ時にのみ訪ひ行き、わが心そのままなる思ふけに耽りて、去りたき時に立去るも強しいて袖引きとどめらるる虞おそれなく、幾年月打捨てて顧かえりみざることあるも、軽薄不實そしりの譏そしりを受けむ心づかひもなし。雨の夜のさびしさに書を読み、書中の人を思ひ、風静なる日その墳墓をたづねて更にその為ひととな

人^りを憶ふ。この心何事にも喩^{たと}へがたし。寒夜ひとり茶を煮る時の情味^{いささか}聊これに似たりともいはばいふべし。

わが東京の市内に残りし古碑断碣^{だんけつ}、その半は癸亥^{ななかば}の歳^{きがい}の災禍^{とし}に烏有^{うゆう}となりぬ。山の手の寺院にあるもの、幸にして舞馬^{ぶま}の災を免^{まぬか}れしといへども、移行く世の氣運は永く市塵^{しちん}繁華の間に金石の文字を存せしむべきや否や。もしこれ杞人^{きじん}の憂ひにあらずとなさんか、掃墓の興は今の世に取残されしわれらのわづかにこれを知るのみに止りて、われらが子孫の世に及びては、これを知らんとするもまた知るべからざるものとはなりぬべし。

掃墓^{かんじぎ}の間事業^{じぎょう}は江戸風雅の遺習なり。英米の如き実業功利の国にこの趣味存せず。たまたまわれ巴里^{パリ}にありてこれあるを見し

かど、既に二十年前のことなれば、大乱以後の巴里の人士今なほ然るや否や知るべくもあらず。江戸時代にありてあまね普く探墓の興を世の人に知らしめし好奇の士は、『江戸名家墓所一覽』の一書を著せし老樗軒ろうちよけんの主人を以てまづはその鼻祖ともなすべきにや。『墓所一覽』の梨棗りそうに上せられしは文政紀元の春なること人の知るところなり。

春秋の彼岸は墓参の時節と定められたり。しかれども忘れられたる古墳を尋ね弔とむらはんには、秋の彼岸にはひあし既に傾きやすく、やうやうにして知れがたき断碑を尋出して、さて寺の男に水運ばせ苔こけを洗ひ蘿つたを剥はがして漫まんかんせる墓誌なぞ読みまた写さんとすれば、衰へたる日影の蚤はやくも春うすつきて蝸ひぐらしの啼なきしきる声一ひときわ際耳につき、

読難き文字更に読難きに苦しむべし。春の彼岸には風なほ寒くして雨の氣遣きづかはるる日もまた多きをや。花見の頃は世間さわがしければ門をいづる心地もせざるべし。八重の桜も散りそむる春の末より牡丹ぼたんいまだ開かざる夏の初こそ、老軀杖ろうくをたよりに墓をさぐりに出づべき時節なれ。長き日を歩みつづけて汗ばむ額も寺の庭に入れば新樹の風ただちにこれを拭ひ、木の根石の端に腰かくるも藪蚊やぶかいまだ来らず、醜草しこくさなほはびこらざれば蛇のおそれもなし。苔蒸す地の上には落花なほみだれてあり。日の光にかがやく木の芽のうつくしき雨に打れし墓石の古びたるに似もやらねば、亡き人を憶ふ心落葉の頃にもまさりてまた一段の深きを加ふべし。ことし甲子かつしの暮春、日曜日にもあらず大祭日にもあらぬ日なり。

前夜の雨におもてどおり表通も砂ほこりをさまりて、吹き添ふ微風に裏町の泥ぬかるみ濘も大方はかわきしかと思はれし昼過まる丸の内より神田かんだを過ぎてこいしかわはらまち小石川原町なる本念寺ほんねんじに大田南畝おおたなんぼの墓を弔ひぬ。われ小石川白山はくさんのあたりを過る時はかならず必本念寺に入りて北山南畝ほくさん両儒の墓を弔ひ、また南畝が後裔こうえいにしてわれらが友たりし南岳くの墓に香華こうげを手向くるを常となせり。震災の時これらの墳墓ちよういきいかなりしや。殊に南畝の墓碑はこの兆域ちよういきにても形大なるものなれば、倒れ砕けはせざりしやと心にかかりてあたりしが、この日行きて見るにその位置少しく変りしのみにて石は全まったかりき。南岳の墓は本もとのところもとに依然として立ちたり。自然石にて面まへに大田南岳墓。碑陰にまつくろな土瓶どびんつゝこむ清水かなの一句を刻す。

これ南岳の句にして小波巖谷先生書する所、石もまた巖谷翁の

賢しすを捐すてて建てられしものなり。われ初て南岳と交まじわりていを訂せしは明

治三十二年の頃清朝の人にして俳句を善くしたりし蘇山人羅臥雲

が平川天神祠畔ひらかわてんじんしはんの寓居いみなとにおいてなりけり。南岳諱は亨。野

口幽谷ゆうこくの門人なり。初陸軍士官学校に入らむとして体格検査に

合格せざりしかば、素志ひるがえを翻かえして絵事かいじに従へるなり。その初武はじめを

以て身を立てんと欲せしはその家世 征夷府に仕へて徒士かちたりし

によれるもの歟か。南岳わか少くして耳聾ろうせり。人と語るに音吐鐘おんとの如

し。平生奇行に富む。明治卅八年秋八月日魯兩國講和条約の結ば

れし時、在野の政客暴民を鼓煽こせんし電車を焼き官庁を破壊す。輦れんこ

轂くの下巡邏じゆんらを見ざるおのおのこと数日に及べり。市民各その欲する所

ほしいまま
 を恣にする事を得たりしかば、南岳白日夜をまとはず釣竿を肩に
 して桜田門外に至り綸いとを御溝おほりに垂れて連日鯉魚十数尾を獲えて帰り
 しといふ。また大婚式記念郵便切手の発行せられし時都人各近鄰
 の郵便局に赴き局員に請こひて、記念当日の消けし印いんを切手に捺なせし
 む。南岳すなわち輒春画を描きたる絵葉書数葉を手にし郵便局の窓に抵いたり
 て消印を請ふ。局員裏面の絵画に心づかず消印をなすこと三、四
 葉にして初て驚愕の声を発す。この時おそし南岳えんび猿臂を伸べ絵葉
 書を奪つて疾走す。後に人に語つて曰いわくこれ洵まことに敵家へいかの宝物なり。
 子孫の繁栄を祝するものけだしこれに優るものあるを知らずと。
 その為ひととなり 人おほむねかくの如し。かつて上野なる日本美術協会
 の展覧会に出品して褒ほうじよう状じようを得たり。褒賞授与の日川かわ端はたぎ玉よく

しょう

章手づからこれを南岳に与へしに、南岳一礼して手に取るや否

や、寸断して脚下に放棄し、悠悠としてその席に還りて坐す。満

堂の画人皆色を失ふ。南岳おもむろに鄰席を顧て曰く諸君驚くこ

となかれ、我狂するにあらず。唯平生川端玉章の為人を好まず、

従つてその手に触れしもの我これを受ることを欲せざるのみと。

爾来復ふたたび浮名を展覽会場に争はず。閑居自適し、時に薬草を後園に

栽培して病者に与へ、また『田うごき草』と題する一冊子を刊刻

してその効験を説く。人戯たわむれに呼んで田うごきの翁おきなとなせり。南岳また年々土中に甕かめを埋めて鈴虫を繁殖せしめ、新涼の節を待つてこれを知友わかに頒つ。南岳を知るものの家秋に入つて草虫琳琅りんろうの

声を聴かざる処なし。知友また呼ぶに鈴虫の翁を以てす。南岳は

弓術の達人にしてまた水府流遊泳の師たりき。大田南畝おたなんぼが先人自得翁の墓誌を見るに、享保二十年七月、將軍吉宗公中川狩獵の時徒兵の游泳を閱けみするや自得翁水練すいれんに達したるを以て嘉賞する処となりしといふ。されば南岳の水練に巧なるけだし来由する所ありといふべきなり。大正四、五年の頃南岳四谷の旧居を去つて北総市川の里に徙うつり寒暑昼夜のわかちなく釣魚ちようぎよを事とせしが大正六年七月十三日白昼江戸川の水に溺れて死せり。人その故を知るものなし。あるひは言ふ水中にあつて卒中症を發したるならんと。時に年四十又三ゆうなり。その配中村氏は南畝先生が外姑がいこの後裔うえいなり。容姿艶麗そのいまだ嫁せざるや近鄰称するに四谷小町よつやこまちの名を以てしたりしといふ。某男某女あり。嗣子しし名は大。家を継

ぎしが本年の春病んで歿したりしと。われこの日始てこれを寺僧に聞得て愕然がくぜんたりき。因ちなみにしるす南岳が四谷の旧居は荒木町絃げんか歌の地と接し今岡田とかよべる酒樓の立てるところなり。この日兼てより写し置かんと思ひゐたりし南畝しゅうが室富原氏の墓誌を手帳にしるす。墓誌の終に悼亡とうぼうの詩六首を刻したり。『蜀山集』に出でたればここに録せず。

本念寺を出で白山はくさんごんげん権現の境内をよこぎりわづかに人力車を通ずべき垣根道を北へと歩み行けば、坂の下に蓮久寺とよべる法華寺あり。これ去年癸亥きがい七月十二日わが狎友こうゆう唾々ああし子井上精一君が埋骨のところなり。門に入るに離々たる古松の下に寺の男の落葉掃きゐたれば、井上氏の塋域えいいきを問ふ。導かれて行くにまだ

一周忌にも到らざれば、冢ちようど土新ちゆうどにしていまだ碑碣ひけつを建てず。傍かたわらなる妣はは某氏の墓前に香華たむを手向けて蓮久寺を出づ。われは今日に至りても唾々子既に黄土に歸せりとの思をなすこと能あたはず。この日子のわれと共にあらざるは前夜の酒を病みなぞして約そむに背きて来らざるが如き心地のせらるるのみ。世に竹馬ちくばまじわりの交をよろこべるものは多かるべしといへども、子とわれとの如く終生よく無頼の行動を共にしたるものは稀なるべし。学生の頃悪少年を以て目せられしものは、儕せいはい輩うちの中子とわれとの二人なり。十六、七の頃には俱ともに漢詩を唱和し二十の頃より同じく筆を小説に染めまた俱に俳諧ひやくかいに遊べり。わが狎妓こうぎの窃ひそかに子と情を通じたるものあり。子の情婦にしてわれのこれを奪ひしものまたなしとせず。けだし這し

やはん

般の情事は烟花場裏一夕の遊戯にして新五左衛門等の到底解し

得べきところに非あらざるなり。われ田舎の人より短冊を乞はるることあるや常に唾々子が句を書して責せめを塞ふさげり。われ俳才なく自作の句を記憶せず。これを憶おもふ時子の名吟まづわが念頭に浮びいづるを以てなり。旧交を追想して歩を移すほどに、いつしか白山はくさん御殿町ごてんまちを過ぎ、植物園に沿ひたる病人坂に出づ。坂の麓に一古

寺あり。門に安閑寺の三字を掲げたり。ふと安閑寺の灸とて名高

き艾もぐさを売りしはこの寺なり。われら稚いとけなき頃その名を聞きてさへ恐れて泣き止みしものと心づけば、追想おのづから縷る々として糸

を繰るが如し。その頃植物園門外の小径は水田に沿ひたり。水田

は氷川の森のふもとより伝通院でんずういん兆域のほとりに連り一流の細水

潺々せんせんとしてその間を貫きたり。これ旧記にいふところの小石川の流にして今はわづかに窮巷の間を通ずる溝こうこうとなれり。ああ四十年のむかしわれはこの細流のほとりに春は土筆つくしを摘み、夏は蛭を撲うちまた赤蛙を捕へんとて日の暮るるをも忘れしを。赤蛙は皮を剥ぎ醤油をつけ焼く時は味よし。その頃かなとみちよう金富町なるわが家の抱車夫かかえしやふに虎蔵とて背に菊慈童きくじどうの筋ぼりしたるものあり。その父はむかし町方まちかたの手先なりしとか。老いて盲目めしいとなり悴虎せがれ蔵の世話になり極楽水の裏屋に住ひゐたり。虎蔵わが供をなして土筆を摘み赤蛙を捕りての帰道、折節父の家に立寄り夕餉ゆうげの菜さいにもとて獲たりしものを与へたり。貧しき家の夕闇に盲目めしいの老夫のかしらを剃りたるが、兀ごっぜん然として仏壇に向ひて鉦叩かねき経誦よめる

後姿、初めて見し時はわけもなく物おそろしくおぼえぬ。わが家の女中ども虎蔵がおやぢはむかし多くの人を捕へ拷問なぞなしたる報むくいにて、目も見えぬやうになりしなりと噂せしが、虎蔵もやがてわが家より暇取りいとまし後いつか牛込警察署の刑事となり、わが十七、八の頃一番町の家に来りて、ゆうべは江戸川端の待まち合あいにて芸者の寝込を捕へたりなぞ、その後家に来りし車夫に語りゐたりしを聞きし事ありき。極楽水の麓を環めぐりし細流のほとりには今博文館の印刷工場聳え立ちたれば、その頃仰ぎ見し光円寺の公孫樹いちようも既に望むべからず。小家の間の小道を上りて久堅町ひさかたまちより竹たけは早やちよう町の垣根道を過ぐるにかつて画伯浅井忠あさいちゆうが住みし家の門前より、数歩にして同心町どうしんちようの康衢こうくに出づ。電車砂塵を捲まいて

来^{らい}往^{おう}せり。道の向側は切支^{きりしたんざか}丹坂に通ずる坂の下口にて、旧丹
 後舞鶴の藩主牧野家の黒板塀、玄関先の老樹と共に四十年のむか
 しに変わる所なければ、なつかしさのあまり覚えず歩を止む。切支
 丹坂より茗荷^{みよがだに}谷のあたりには知れる人の家多かりき。今はあり
 やなしや。電車通を伝通院の方に向ひて歩みを運べば、ほどなく
 新坂^{しんざか}の降口^{おりくち}あり。新樹^{こずえ}の梢^{こずえ}に遠く赤城の森を望む。新坂には
 わが稚^{くどう}き頃^{しゅうきよ}大学総長^{もんしやう}浜尾^を氏の邸^{やしき}、音楽^{おぎさか}学校長^を伊沢^を氏の邸^{やしき}、尾崎^{おぎさか}
 罌^{くどう}堂^{しゅうきよ}が儼^{しゅうきよ}居^{もんしやう}、門^を 墻^をを連ね庭樹の枝を交へたり。この坂
 車を通ぜざりしが今はいかがにや。電車通を行くことなほ二、三
 町にしてまた坂の下口^{おりくち}を見る。これ即^{すなわちんごうじざか}金剛寺坂^{なり}なり。文化の
 はじめより大田南畝の住みたりし鶯^{うぐいすだに}谷^はは金剛寺坂の中ほどよ

り西へ入る低地なりとは考証家の言ふところなり。嘉永板の切絵きり図には金剛寺の裏手多福院に接する処明地あきちの下を示して鶯谷とはえずしるしたり。この日われ切絵図はふところにせざりしかど、それと覚しき小径に進入らんとして、ふと角の屋敷を見れば幼き頃より見覚えし駒井氏の家なり。坂路を隔てて仏蘭西人アリベと呼びしものの邸やしきあと址、今は岩崎家の別墅べつしよとなり、短葉松植ゑつらねし土墻ついでは城塞めきたる石塀となりぬ。岩崎家の東隣には依然として思案外史石橋しあんがいし いしはし氏の居きよあり。遅塚ちづか麗水翁れいすいまたかつてこのあたりに鄰ぼくをトせしことありと聞けり。正徳しょうとくのむかし太宰だざい春台ゆんだいの伝通院でんずういん前に帷とぼりを下せしは人の知る処。礫川こいしかわの地古来より文人遊息の処たりといふべし。さてわれは駒井氏の門前よ

り目指せし小路を西に入るに、ここにもまた幼き頃見覚えたりし
 福岡氏の門あり。福岡氏は維新の功臣なり。門前の小径は忽たちまちにし
 て懸けん崖がいの頂いたに達だし紐ひもの如く分れて南北に下れり。崖下に人家あ
 り。鶯谷は即このあたりをいふなるべし。さるにても南畝せんきが遷せん
 喬ようろう楼の旧址はいづこならむ。文化五戊辰ぼしんの年三月三日、南畝
 はここに六秩ろくちつの賀筵がえんを設けたる事その随筆『一話一言』に見ゆ。
 おおくぼしぶつ
 大窪詩仏が『詩聖堂詩集』巻の十に「雪後鶯谷小
 集得庚韻」と題せるもの南畝の家のことなるべし。その
 作に曰く

遷喬楼在懸崖上

〔遷せん喬楼きょうろうは懸崖けんがいの上うえに在あり

闌干方与赤城平

闌干らんかんは方まさに赤城せきじょうと平たいらなり

霞氣不消連旬雪
 万瓦渾如粧水晶
 疑在広寒清 府
 四望生眩総瑩瑩
 主人愛客兼愛酒
 暇日開宴迎客傾
 衣冠何須挂神武
 与身并忘刀筆名
 我是江湖釣漁客
 平生不曾接冠纓
 十里泥濘深於海

霞氣も消さず連旬の雪
 万瓦は渾て水晶を粧うが如し
 疑うらくは広寒清虚の府に在るか
 四望は眩を生じて総て瑩瑩たり
 主人 客を愛し兼ねて酒を愛し
 暇日 宴を開き 客を迎えて傾す
 衣冠何ぞ須ん神武に挂ることを
 身と与に并て忘る刀筆の名
 われ 我是れ江湖の釣漁の客
 へいせい 平生曾て冠纓に接せず
 十里 泥濘 海よりも深けれども

今日肯来訂酒盟

今日あえ肯あて来たりて酒盟しゅめいを訂むすぶ

唯応爛醉報厚意

唯ただまさ応らんすいに爛ことうい醉むくして厚意むくに報むくゆべく

对君不醉作麼生

君たいと对よして醉いわかんずせんんば作麼生い

また六樹園ろくじゆえんが狂文

『吾あずま婦なまり』に鶯谷のさくらら会と題する

一文ありて、勾欄こうらんの前なる桜の咲きみだれたるが今日の風にや

や散りそむといへど、今はそれかとおぼしき桜の古木もさぐるに

よしなし。このあたり今は金富町かなとみちようと称となふれど、むかしは金かなす

杉ぎ水道町にして、南畝がいはゆる金曾木かなそぎなり。懸崖きやうぼくには喬木

なほ天を摩まし、樹根怒張して巖石ささまの状さまをなせり。澗道かんどうを下る

に竹林の間に椿の花開くを見る。人家の犬籬りはの間より人の来る

を見て吠ゆ。宛然でんか田家の光景なり。細徑に従つて盤回すればおの

づから金剛寺の域さかいに出づ。寺はわづかに堂宇を遺すのみにして墓田ことごとは尽く人家となりたれば、旧記に見る所の実朝さねともの墓も今は尋ぬべきよすがもなし。本堂の前を過ぎ庫裏くりと人家との間の路地に入るに、迂回して金剛寺坂の中腹に出でたり。路地の中に稚おさなき頃見覚えし車井戸なほあるを見たり。大都ことうの康莊そうそうは年々面目を新にするに反して窮巷きゆうかう屋後の湫路しゆうろは幾星霜を経るも依然として旧觀あたらたを革あらためず。これを人の生涯に觀るもまたかくの如かき歟。人一たび勢利ちまたの巷ほんちに奔馳するや、時運に激せられて旧習あなじよに晏あ如じよたる事あた能たはず。たまたま鄰人の新聞紙をよみて衣服改良論となうを称となるものあれば忽雷同たちまちして、腰のまがつた細君にも洋服をまとはしめ、児輩の手を引いて、或時は劇場に少女歌劇を見、或時は日比谷街

頭に醜陋しゅうろうなる官吏の銅像を仰いでその功績を説かざるべからず。然るに独吾輩ひとりの如き世間無用の間人かんじんにあつては、あたかも陋巷の湫路今なほ車井戸と総後架そうごうかとを保存せるが如く、七夕には妓女と彩紙いろがみを截きつて狂歌を吟じ、中秋には月見団子つきみだんごを食つて泰平を鼓腹するも、また人のこれを咎とがむることなし。幸なりといふべし。

金剛寺坂の中腹には夜ごとわが先考せんこうの肩揉もみに来りし久きゆう斎さいとよぶ按摩住あんまみたり。われかつて卑稿でんずういん『伝通院』と題するものつくりし折には、殊更に久を休につくりたり。久斎姓は村瀬名は久太郎といへり。その父寅吉といへるは幕府の御家人ごけにんなりしとか。わが家金富町より一番町に移りし頃久斎は病みて世を去り、

その妻しんといへるもの、わが家に来りて炊爨すいさん浣滌かんできの労を取り、わづかなる給料にて老いたる姑しゅうとめと幼きものを養ひぬ。わが父三たび家を徙うつして、終ついに燕息えんそくの地を大久保村に卜せられし時、衡門こうもんの傍なる皂莢さいかちの樹陰に茅茸かやぶきの廢屋ありて住むものもなかりしを、折から久齋が老母重き病に伏したりと聞き、わが母上ここに引取り、やがて野辺のべのおくりをもなさしめ玉ひけり。しん深くこの恩義に感じてや、先考館舎せんこうを捐すてられし後は、一際ひときわまごころ籠めてわが家のために立ちはたらきぬ。大正七年の暮われ先考の旧居を人に譲り琴書を築地の儼しゅうぎよ居に移せし時、しんは年漸く老い、両眼既におぼろになりしかば、その悴せがれの既に家を成して牛込うしごめ築土つくだどに住みたりしをたより、次の年の春暇いとまを乞ひて

わが許を去りぬ。去るに望みて、御用の節にはいつにても御知らせ下さりましきしづめ来月の大掃除にはお手つだひに上りませうと言ひゐたりしがそのかひもなく、一月あまりにして突然身まかりし趣、悴のもとより言越いひこし来りぬ。享年六十余歳。流行感冒に罹りて歿せしといふ。しん逝ゆきて後ここに幾年、わが家再びこれに代るべき良婢を得ざりき。しんは武州南葛飾郡新宿の農家に生れ固もとより文字を知るものにもあらざりしかど、女の身の守るべき道と為すべき事には一として闕かくところはあらざりき。良人おととにわかれて後永く寡かを守り、姑を養ひ、児を育て、誠実の心を以てよく人の恩義に報いたり。われ大正当今の世における新しき婦人の為す所を見て翻ひるがえつてわが老婢しんの生涯を思へば、おのづから畏

敬の念を禁じ得ざるも豈偶然ならんや。しんの墓は小日向水

道町ようなる日輪寺にありと聞きしのみにて、いまだ一たびも行き

て弔とむらひしことなければ、この日初夏ひあしのひあしのなほ高きに加へて、寺

は一牛鳴いちぎゆうめいの間にあるをさいはひ杖を曳きぬ。路傍に石級せききゆう

あり。その頂いただきに寺の門立ちちたり。石級の傍別に道を開きて登るに

易やすからしむ。登れば一望たちまち忽曠然として、牛込赤城うしごめあかぎの嵐光人家らんこう

を隔へてて翠すいしよくしたた色滴らむとす。供養くようの卒塔婆そとばを寺僧にたのまむと

て刺しを通ぜしに寺僧出で来りてわが面を熟視する事良しばらく久くにして、

わが家小石川にありし頃の事を思起したりとて、ここに端はしなく四

十年のむかしを語出せしもまた奇縁なりけり。

やがて寺のしもべ来りて兆域ちよういきに案内す。兆域は本堂のうし

ろなる丘阜きゆうふにあり。石磴せきとうを登らむとする時その麓なる井のほとりに老婆の石像あるを見、これは何かと僕しもべに問へば咳嗽せきのばばさまとて、せきを病むもの願がんを掛け病癒いゆれば甘酒を供ふるなりといへり。この日も硝子罈ガラスびんの甘酒四、五十本ほども並べられしを見たり。靈験れいげんのほど思ひ知るべし。

日輪寺を出で小日向水道町を路の行くがままに関口に出で、目白坂の峻坂を攀よちて新長谷寺しんちやうこくじの樹下に憩いこふ。朱塗しゆぬりの不ふ動どう堂うは幸にして震災を免れしかど、境内の碑碣ひけつは悉くいづこにか運び去られて、懸崖の上には三層の西洋づくり東豊山とうほうざんの眺望を遮しやだん断したり。来路を下り堰口せきぐちの瀑たきに抵いたり見れば、これもいつかセメントにて築き改められしが上に鉄の釣橋をかけ渡したり。

駒留橋こまとめばしのあたりは電車製造場となり上水の流は化して溝※こうとくとな
れり。鶴巻町の新開町を過れば、夕陽せきようペンキ塗の看板に反映し
洋食の臭気ふんぷん芬々たり。神楽坂かぐらざかを下り麴町こうじまちを過ぎ家に帰れ
ば日全く昏くらし。燈を挑かかげて食後戯たわむれにこの記をつくる。時に大正十
三年甲子かつし四月二十日也。

青空文庫情報

底本：「荷風隨筆集（上）」岩波文庫、岩波書店

1986（昭和61）年9月16日第1刷発行

2006（平成18）年11月6日第27刷発行

底本の親本：「荷風隨筆 三」岩波書店

1982（昭和57）年1月18日第1刷発行

※「漢詩文の訓読は蜂屋邦夫氏を煩わした。「旨の記載が、底本の編集付記にあります。

※ルビは新仮名とする底本の扱いにそって、ルビの拗音、促音は小書きしました。

※誤植を疑った箇所を、親本の表記にそって、あらためました。

※「南畝」と「南畝」の混在は、底本通りです。

※表題は底本では、「礫川※ [#「イ+湊のつくり」、第3水準1-84-33] ※ [#「イ+羊」、第3水準1-84-32] 記《れぎせんしよ
うようぎ》」となっています。

入力：門田裕志

校正：阿部哲也

2010年5月28日作成

2019年12月29日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://w>

ww.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

永井荷風

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙